



元気っ子

No 291 ながさわ保育園

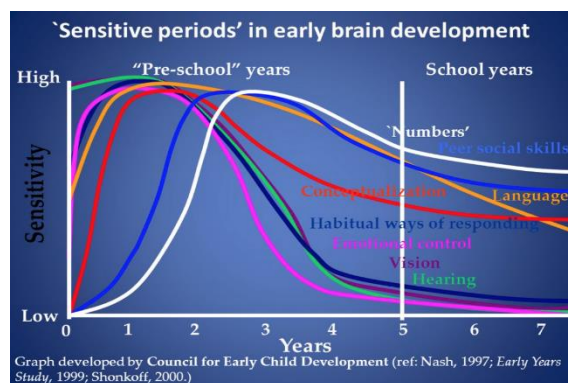
園長 中瀬 弦 偉

11月に入りました。今年は秋という季節がないまま冬に突入したような印象で、急な寒暖差で体調を崩しやすくなっています。ご家庭でもお子さんの体調面には特に心配りをお願いしたいと思います。

さて、先月の「元気っ子」で時代や社会が求めるものの変化についてのエピソードを紹介させていただきました。このことをもう少し詳しくお話していこうと思います。

私達の学生時代においては、知識をいかに多く詰め込めるかということが成功への鍵でした。試験にしても暗記ができさえすれば、それなりの成績をおさめることができ、評価をされてきました。学校においては、こういった評価制度からの脱却にはもう少し時間がかかるかもしれませんが、社会の変化はもっと早く訪れています。それは人工知能の進歩やコロナ禍においてさらにスピードアップしたように感じます。暗記や機械的作業、またIQなどテストで測り数値化できるような知的な能力（学力）といった認知能力への社会的ニーズはどんどん減り、逆に自制心・自律心、自己肯定感、他人への配慮、感情のコントロールや人とうまく関われる力といった非認知能力の高さが社会から求められる時代へと変わってきました。このことは日本だけではなく、全世界でこういった時代の変化が起こっています。それはOECD（経済協力開発機構）が2015年から進める「Education 2030」という世界的プロジェクトからも分かります。

それではなぜ保育においてこういった非認知能力の獲得が必要とされているのか、それは近年、明らかになってきている脳科学分野の研究結果が示しています。右の表にあるように、脳の敏感期は、そのほとんどの分野で3歳までにピークを迎えるということが分かっており、就学前の乳幼児期にこそ、効果的に非認知能力を育てていく必要があるからです。



指導的要素が強かったり、一斉に何かに取り組んだりする保育は、学校的な指導方法をモデルにしていることがほとんどなのですが、先に述べたような暗記や知識量の多さなど認知能力が評価される時代であれば、最も効果的な方法だと思います。しかし、認知能力の高さが評価に直結しなくなる時代においては、当然、保育内容も変化しなくてはなりません。（現に「保育所保育指針」からも「指導」という言葉がなくなりました）

ながさわ保育園での取り組みで、子どもに「自己決定」を促す場面をできるだけ多く取り入れたり、自分で気持ちを律する「自律心」を育むような保育を心掛けたり、異年齢児保育を母体として活動しているのは、こういった時代がもう目の前まで迫ってきているからです。

今後も様々な取り組みについて、その目的や意味についても掲示をすることで、保育の透明性を確保しながら、ご家庭と共に子どもの育ちを考えていけたらと思います。